

琉球大学学術リポジトリ

PROJECT UKWANSHIN

2007 ハワイと沖縄, そして, 過去と今をつなぐ文化実践Projectの試み —Identity 「琉球之子」
Children of Loochoo—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 御冠船歌舞団, 沖縄公演 キーワード (En): Ukwanshin Kabudan 作成者: 和多, エリック, 金城, ノーマン, 赤嶺, ゆかり, 上原, こずえ, Wada, Eric, Kaneshiro, Norman, Akamine, Yukari, Uehara, Kozue メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010143

PROJECT UKWANSHIN 2007 ハワイと沖縄、そして、過去と今をつなぐ 文化実践 Project の試み —Identity 「琉球之子」Children of Loochoo—

エリック和多・ノーマン金城・赤嶺ゆかり・上原こずえ

キーワード：Ukwanshin Kabudan, 御冠船歌舞団, 沖縄公演

はじめに

2007年6月中旬に、ハワイの3, 4世そして新1世を中心に結成された Ukwanshin Kabudan (御冠船歌舞団) の沖縄公演にあわせて、Ukwanshin Kabudan のメンバーとハワイ大学大学院に在籍する学生や卒業生が連携し『Project Ukwanshin 2007 ハワイと沖縄、今と過去を結ぶ文化実践プロジェクト』を試みた。本稿は、このプロジェクトについて、Ukwanshin メンバーであるエリック和多とノーマン金城、そして、サポートメンバーの赤嶺ゆかりと上原こずえが共同執筆を行い、記録報告とする。以下では、はじめにこのプロジェクトに至る経緯を述べ、Ukwanshin Kabudan について説明する。そして、6月16日(土)のうるま市民芸術劇場における古典芸能舞台公演や全プロジェクト行程についてその概要と趣旨を明らかにする。次に、6月17日(日)のうるま市字具志川公民館でのアイデンティティ討論会、6月18日(月)の辺野古座り込みテント訪問などのフィールドノードを報告し、最後に今回の Project Ukwanshin の意義についてまとめる。

では、Ukwanshin Kabudan メンバーと沖縄出身の学生が、この共同プロジェクトを試みるに至る経緯を述べる。赤嶺と上原は、それぞれハワイイーストウエスト(東西)センター小淵沖縄教育研究プログラム奨学生として、ハワイ大学大学院に派遣されている(赤嶺は2007年5月まで)。Ukwanshin Kabudan の音楽ディレクターである金城は、ハワイ大学音楽学部の講義「Okinawan Ensemble」において歌さんしんの講義を担当しつつ、ハワイ大学の「沖縄歌さんしんサークル」の顧問監督もしている。上原は、このサークルに2007年より所属して歌さんしんを学び、赤嶺は2007年1月より5月まで、Ukwanshin の舞台芸術ディレクターである和多が主宰する琉球舞踊研究所に所属し古典舞踊を学んでいた。上原や赤嶺以外の奨学生や沖縄研究者/学生も Ukwanshin Kabudan のメンバーらと日頃から日常レベルでの文化的な交流を行っている。

今回のプロジェクトの直接のきっかけは、第一に、2008年秋学期からハワイ大学に沖縄研究科が開設されることになったことに触発されて、大学の三線講師である金城や古典舞踊を教える和多と、東西センターに派遣された学生たちとの間で「文化実践」や「伝統」

「文化」についての問題意識の共有や議論が深まったことによる。第二には、2007年4月にハワイ大学の日本研究科において、沖縄研究科設立に向けてのパネルディスカッションが開催されたことによる。このディスカッションに、パネリストのひとりとして赤嶺が参加していた。その後、フロアから参加していた和多是赤嶺に、このような問題意識を共有し語り合うための集まりを沖縄公演の際にも行いたいという提案があった。これは金城が言う「プロジェクトベースのUkwanshinによる文化実践の試み」を可能にする絶好のチャンスであると赤嶺は捉えた。そして、沖縄での「Project Ukwanshin」の企画準備を和多、金城、そして上原とともに開始した。このようにして、和多や金城、赤嶺、上原、さらに翻訳や企画に関わった他の小渕奨学金派遣学生が連携し、「ハワイと沖縄、過去と今を結ぶ、文化実践プロジェクト」を試みるに至った。

次に、Ukwanshin Kabudan 沖縄公演が実現されるまでの経緯を紹介する。和多と金城は、1995年5月には字具志川公民館で、翌年1996年3月にはハワイで行われた具志川三絃塾の10周年記念公演に参加し、三絃塾の先生である、上原鉄男さんと出会う。それ以来、和多と金城は字具志川の文化活動を担う三絃塾の子どもたちと上原鉄男さん、館長を長年続けている天願憲智さん、その他字具志川の人びとと活発に交流を続けている。そして1999年、字具志川の人々の支援のもと、Ukwanshin Kabudan は、具志川市民芸術劇場（現うるま市民芸術劇場）で初公演「御冠船アロハの旅」を成功させた。また、うるま市の川野信也さん（2007年現在うるま市市議）らも、Ukwanshin Kabudan 沖縄公演の運営、会場探しや移動、宿泊などの手配などでご尽力をいただいた。今回の公演についても、うるま市、字具志川の人々の力強い支援があって実現した。討論会と辺野古交流プロジェクトについても、会場設定や移動などに関して、川野さんやその他の人びとの支えがあった。このような交流の歴史が「ハワイと沖縄、そして、過去と今をつなぐ文化実践プロジェクト」を実現させたことを付け加えておく。

ここで、Ukwanshin Kabudan について説明する。この歌舞団は、1998年、ハワイの沖縄系3、4世と新1世を中心に、琉球伝統芸能文化の保存と継承を目的に結成された。Ukwanshin Kabudan 設立には、三つの目的があった。第一に、沖縄についてあまり知らないハワイの3、4世に沖縄の良いところを伝えるということ。二つ目に、沖縄に住む人びとが言いにくいことや言えないことを、ハワイという離れたところにいる我々が声に出すこと。そして、沖縄から離れた土地で守りつづけてきた古典文化をシェアすること。三つ目に、ハワイと沖縄、同じ「島に住むシマンチュ」そして考えを分かち合い、互いに理解を深めるということ。沖縄の芸能に関わっているハワイの3、4世の人びとは、文化を通して沖縄の視点を学ぶ。またアメリカ人としての立場も持つ。さらにハワイで育ったシマンチュとしてのアイデンティティもある。

和多や金城をはじめとする Ukwanshin Kabudan メンバーは、幼い頃より両親、祖母、または村人会などの沖縄コミュニティ・「シマ共同体」の中で、歌さんしんや踊りといった貴重な文化を受け継いできた。Ukwanshin Kabudan の芸術舞台ディレクターである和多、音楽ディレクターである金城は、ハワイでは主に琉球古典文化（歌さんしん・踊り）の師範および教師として、沖縄コミュニティの内外、自らの研究所、ハワイ大学音楽学部や大学内のサークル、ワークショップ、盆ダンスなどを通して、琉球古典音楽および古典舞踊と、現在の沖縄における文化や歴史とのつながりの大切さを伝えている。

Ukwanshin Kabudan は、沖縄公演以外にも、ハワイの各島々やアメリカ本土などの各地で公演を行っている。舞台では特に、苦難の歴史を歩んできた沖縄一世への敬意をあらわした内容を構成する。ディレクターである和多や金城は、歌さんしんや踊りを通して、戦前の沖縄の歴史や社会的背景について深く考えることができるような公演内容を練り上げてきた。そして、舞台公演以外にも、共同体の機能を持ちつつ新しいネットワークの広がりを生み出しているハワイの各島々の村人会などにおいて、学びを目的としたワークショップ等を行っている。ワークショップでは、アメリカ人であり、またハワイのローカルでありながらも、ハワイで生まれ育った「シマンチュ」としての誇りとアイデンティティを持つ「心」や「力」を若い世代に継承することを目的としている。ディレクターの和多は、沖縄を遠く離れ世代を経ても、このような文化実践が、わったー「シマ（地域共同体）」の結束とハワイで生きる「シマンチュ」としてのアイデンティティを強くする、と主張する。

PROJECT UKWANSHIN 2007 ハワイと沖縄、そして、過去と今をつなぐ文化実践の試み

1 日目 『Identity 「琉球之子」Children of Loochoo 2007』

今回のうるま市での舞台公演は、Ukwanshin Kabudan の主要メンバーである琉球古典舞踊および三線教師の3人、和多（踊り）、金城（三線）、そしてキース仲兼久（三線）のそれぞれの「独演会」スタイルに近いかたちで行うという基本構想から始まった。そして、芸術と舞台ディレクターを努める和多と金城が、これまでの調査研究も発表できるような舞台内容にしたいと考え、舞台構成および脚本を練り上げた。歌と踊りを紹介する際、その意味と背景を伝えるための、より効果的な方法として、演目の合間に、ナレーションや祖母と孫の対話の流れる、という脚本を作り上げた（Kabudan メンバーである宮崎貴子さんとドーリス美代子・兼城さん、小渕奨学金派遣学生の崎原正志さんが声で出演）。この対話には、これまでの調査研究の成果と Ukwanshin が特に伝えたいメッセージが含まれていた。我々は、古典文化や伝統を受け継ぐとことが、ただ単にアイデンティティを守るためではなく、「ウヤファーフジ（先祖）」とのつながりや、芸術が栄えた琉球の時代の音楽や踊りとつながることであると考えている。今を生きる私たちが、文化実践を通

して、過去あるいはウヤファーフジとつながるといふことで、『Identity 「琉球之子」 Children of Loochoo』というテーマに設定した。次に、和多による公演当日の記録を紹介する。

<フィールドノート1>

2007年6月16日土曜日うるま市民芸術劇場響ホール

舞台の日の一日は、すばらしい天候と共に始まった。リハーサルが始まると、リハーサルを観ている方々にも私たちのメッセージが伝わっているのを感じた。目から涙があふれてきた。今回の公演についてことばで説明するのがとても難しいというのを、リハーサルを観ている友人たちもわかってくれたようだった。さらに不思議なことに、リハーサルの時にノーマンが「なつかしい故郷」を歌っていると、誰かがノーマンに合わせて歌っているように聞こえた。音響の方もそれに気づき、ステージにかけよってマイクを再度チェックしたり、ノーマンの真後ろに立ってこの声がどこから聞こえるのか確認したが、わからないようだった。

リハーサルが終わり、夕方になってついに舞台公演が始まった。幕が開き、祖母と孫の対話が始まると、会場ではハンカチで涙をぬぐう人びとの姿が見られた。我々のメッセージを心から感じているのだと知り、舞台の上で感動した。会場に来てくださった子どもからお年寄りまで、みんなが同じ気持ちを共有し、つながったのだ。

古典舞踊「諸屯」を踊っている時、ハワイでのリハーサルの時に聞こえた声が、また耳元で聞こえた。踊っているあいだ中、日本語で「こうじ」と呼ぶ声が聞こえていた。これはキース仲兼久（三線教師）の日本名である。後から聞くと、キースの祖父（三線の師匠）は生前、彼を「こうじ」と呼んでいたらしい。驚いた。

公演終了後、琉球の古典音楽や舞踊について全く興味がなかったという観客の若い子どもたちが、Ukwanshinの舞台を観てとても感動したということも知った。古典文化を知らない若い世代も、言語と歴史を守りつつ伝統文化を大切にする義務がある事に気づいたのではないか。多くの若い観客が、祖母と孫の対話を聞いて、孫の気持ちが理解できる、まさに自分らの言いたいことであつた、と教えてくれた。

舞台公演の後、和多、金城、仲兼久の3人はステージフロアに座り、会場の人びととのユンタクを続けた。上記の和多の記録にあるように、いろんな世代の方が古典のすばらしさに感動したことを話してくれた。そして、うるま市のある老人ホーム関係者の方は、「ウ

ヤファーフジのおかげで自分が今ここに生きているんだということを、子や孫に必ず伝えていきたい」と感想を述べて下さった。わずかな時間ではあったが、多くの地元の方々と意見を交換する事ができた。「もっと議論をしたい方は翌日のアイデンティティ討論会へおいで下さい」という流れで舞台の全日程は終わったが、Project Ukwanshin は始まったばかりだった。

2日目 Project Ukwanshin —IDENTITY 琉球之子(るーちゅーぬ くわ) CHILDREN OF LOO CHOO—アイデンティティ討論会

公演の翌日、アイデンティティについて語りあう討論会を開催した。これも地元字具志川の人々の協力と具志川公民館の運営協力があって実現できたことだ。Project Ukwanshin が、沖縄において平和について最も深く考えるこの時期に、字具志川公民館にて「シマンチュ」のアイデンティティについて考える意義とは何か。近年、沖縄でも、ハワイのように自らの言語と文化を見直し、さまざまな方面で言語や文化の再活性化に取り組むようになってきたように見えるが、「シマ(地域)」に生きる我々の「アイデンティティ」とは何か。海を越えたハワイと沖縄、それぞれのコミュニティで文化実践に取り組み、アイデンティティの継承、および地域おこしに携わる意味をざっくばらんに話し合い、「わったーシマ」のアイデンティティの重要性を考える機会にしたかった。

企画段階から、和多、金城、赤嶺は、これまでのパネルディスカッションとは違う、気軽に地元の若い人々が双方向で議論できる雰囲気を作りたいという強い思いがあった。そこで我々は、ハワイ大学で4月に行われた沖縄研究科設立に向けてのパネルディスカッションの際に採用された informal round-table (形式ばらない円卓座談会スタイル) で会を進めることとした。そのパネルディスカッションにパネリストとして参加した赤嶺は、フロアとパネリストの垣根を外したコミュニティに開かれたスタイルのセッションに感動した。研究者だけでなく、ハワイの沖縄コミュニティと共に、沖縄研究科開設に向けて問題意識を共有できたセッションだったのだ。このスタイルが、今回の討論会の進行方法のモチーフとなっている。

<フィールドノード2>

2007年6月17日日曜日 アイデンティティ討論会 うるま市字具志川公民館

討論会は、和多と金城の歌さんしん「ていんさぐぬ花」で始まった。会場の参加者には、一緒に口ずさむものもいた。ざっくばらんに話しができるように意識して、フロアとパネリストを隔てることはせず、机はおかず円座になり議論できるようにした。我々はこの討論会のスタイルを、ここでは「ユンタク会」と表現した。共通言語は日本語であったため、上原は、パネリストのひとりでありなが

ら通訳として Ukwanshin メンバーの言語のフォローもした。司会進行は赤嶺が担当した。

会場にはおよそ 30 名ぐらいの人々がいたが、参加していた者の半数が、自分の生まれた土地や地域、先祖のことや先祖とのつながり、そして、琉球芸能やシマくとうばとの関わりなどについて語り始めた。当日は、Ukwanshin Kabudan のメンバー、りんけんバンドリーダー照屋林賢さん、タレントの玉城デニーさん、そしてかつちん太鼓、三絃塾をはじめとする地元の方々、また、琉球舞踊家の又吉静枝さん（玉城流いずみ会家元・沖縄県立芸術大学教授）や玉城千枝さん（玉城流てだの会家元）が主な参加者であった。玉城デニーさんは、「子育ての中で、地域の自然との関わりや体験から、子どもたちがシマくとうばの持つ意味の豊かさを学び自分のものにしていくことを発見した」ことについて語った。照屋林賢さんは、世界で通用するアイデンティティについて「自分自身にこだわり、地域にこだわり、そして半径 5 メートルという狭い世界を掘り下げて行けば、普遍になれる」と話したことも議論を深めた。さらに、又吉静枝さんや玉城千枝さんは「文化は変わっていくものである」と主張し、照屋さんや玉城デニーさんからは「古典こそが新しい」という問題提起があった。

この討論会では、地域おこしと文化実践にたずさわるシマンチュととともに、ハワイと沖縄というそれぞれのコミュニティでの文化活動の報告や今後の課題を話し合い、「ワッターシマ」のアイデンティティや、さらにアイデンティティの継承の重要性について改めて考えることができた。ざっくばらんな雰囲気、シマとアイデンティティ、「琉球之子」としてのアイデンティティと問題意識について共有できる機会であった。また、伝統の継承のあり方に関する考え方の違いや伝統芸能における政治と文化の関係については、さらなる議論が必要であると思われた。

3 日目 Project Ukwanshin -IDENTITY 琉球之子(るーちゅーぬくわ) CHILDREN OF LOO CHOO 一辺野古座りこみ参加

ハワイと沖縄、そして過去と今をつなぐ文化実践プロジェクト第3弾として、6月18日（月）一辺野古座り込みへの参加を企画した。海を隔てたハワイでも、Ukwanshin Kabudan は、ハワイ・オキナワ・アライアンス (HOA) というハワイの先住民とローカル、沖縄出身学生とで構成されたグループに関わり、2005 年から毎年6月に開催されてきた「慰霊の日の集い」や、2006 年2月のヘリ基地反対協の安次富浩さん、普天間爆音訴訟の栄野川安邦さんを迎えての慈光園本願寺での講演などで、歌さんしんを通して平和を希求するメッセージを伝えてきた。和多や金城は、スタジオ（稽古場）や研究所、ハワイの島々の

沖縄系コミュニティにおける村人会の集いやワークショップ等を継続して行い、またドキュメンタリービデオなどを活用して、沖縄における米軍基地の問題についても伝えてきた。こうしてハワイの沖縄系コミュニティで活動をひろげてきたことから、今回、辺野古の座り込みに参加することになった。ハワイのレイの贈呈をはじめとし、歌さんしんを通して、平和を求めるために共に行動する機会としたかった。

<フィールドノート3>

2007年6月17日月曜日 辺野古訪問

6月18日の午後、歌舞団全員で辺野古を訪問する。昼食後、大雨のなか、うるま市の宿泊先から名護市辺野古まで、車2台に分かれて出発。Ukwanshinメンバーにとって、座り込みの場に行くのは初めてであった。大雨と強風の中、約1時間半のドライブ。Ukwanshinメンバーが辺野古に到着する頃には、雨は小降りになっていた。メンバーによる歌さんしんとウクレレ演奏のために、座り込みに参加していた人びとが、テントの中に特設舞台を用意して迎えてくれた。

毎日、この辺野古という場所で座り込みを続けている人の前で、ハワイという離れた場所から来た自分たちは何が出来るか。緊張の中、金城による「いま辺野古は特に大変な状況なので、めでたい気分ではない。でも、沖縄とハワイ、これから我々がお互いに頑張っていくために、めでたい歌を歌います。」という挨拶の後、歌さんしんによる『豊節』『祝節』『めでたい節』が続いた。雨の中テントは、指笛と拍手、歌声で熱気に包まれた。ウクレレでは、海藻の豊かさを歌う『カ・ウルヴェヒ・オ・ケ・カイ』などのハワイ音楽が演奏された。音楽が、歌舞団メンバーの思いを伝える大きな手助けをしてくれたようだった。演奏が終わってからも交流は続き、座り込んできた人びとから辺野古で海を守ってきた経緯について聞き、また歌舞団からはハワイをはじめとする太平洋諸島において、米軍基地が住民にどのような被害をもたらしているかを話した。最後に、Ukwanshin Kabudan から座り込みの方々にレイを贈呈した。

ハワイの沖縄系で構成される歌舞団にとって、両地域における問題は共通している。ハワイにおける軍事基地の住民への影響を知る「外」の沖縄系コミュニティの視点と、沖縄の現状を知る人びとの視点とが合わさることは、両者にとって、地域を越えて存在する問題をそれぞれの住民レベルの目から認識する契機となった。

最後に

今回のプロジェクトでは、古典および伝統文化の実践とディスカッション、交流を通し

て、「空間」と「時間」をつなげることを試みた。シマンチュ同士の間でのインタラクティブな関わりやコミュニケーション、つまり、沖縄から地理的に離れた沖縄コミュニティの声と沖縄の地からの声があふつかりあうことで、どのような発見があったのだろうか。

沖縄であろうとなかろうと、伝統文化へのこだわりは、失ったものへのロマンシズムと考えられがちであるが、「過去とつながること」や、「ウヤファーフジとのつながり」を、単に過去への郷愁や、失ったものの美化などと捉えるべきではない。ハワイで学ぶ我々にとって、琉球古典文化および歴史への理解、先住民ハワイアンの歴史やハワイアンの主権回復運動への理解、ひいては、世界規模で進行し続ける乱開発や軍備拡張の地域文化へのインパクトについての理解は、同時進行に深まっていくものなのである。

さらに今回のプロジェクトの目的は、アイデンティティの問題を議論するということがあった。自分の祖父母や祖先がどうつながっているのか。過去が現在にどうつながっているのか。なぜ現在の沖縄があるのか。アイデンティティを持たないと「沖縄をどうしていくか」、「沖縄は今後どう変わっていくべきか」という問いには答えられない。今回の Project Ukwanshin の意図は、沖縄でアイデンティティについてもっと議論してほしい、というメッセージを伝えることであつた。議論が始まることによって考えや問題意識は深まる。そしてそれが行動にもつながる。Ukwanshin Kabudan は、言葉だけでなく、人びとの楽しみである芸能を通して、その問題について訴えている点でより大きな可能性を持っているといえる。

プロジェクト企画の途中、沖縄戦の記述に関する歴史教科書問題や、辺野古で続いている新たな基地建設への反対運動についての情報が沖縄から入ってきた。当初設定した公演の目的以外で、沖縄の問題にどう関わっていけるかを考えさせられた。今回の Project Ukwanshin は、過去を知ることで、過去から現在につながる沖縄の政治的／文化的问题にいかにか介入できるか、そして沖縄とハワイそれぞれの土地で「琉球の子」としてそれらの問題にどう自らが責任を果たし行動していくのか、またハワイや沖縄以外の地域文化の問題にどうコミットしていくのか、という問いについて考え、話し合う相互交流プロジェクトであつた。我々は、古典芸能の研究と実践やそれに関する議論を通して、「文化と政治を切り離すことはできない」という問題意識をその他のシマンチュと共有することができた。重要なのは、伝統文化を学び実践することが、現在の具体的な問題への取り組みにどうつながっていくのか、そして、「文化」はそこでどのような役割をもつのかという問いであり、呼びかけなのである。

(資料1) これまでの Ukwanshin Kabudan の活動実績と活動内容

1998年 御冠船歌舞団 設立

公演内容：

1999年7月 公演名「御冠船アロハの旅」 場所：具志川市民芸術劇場 響ホール

2003年4月 公演名「御冠船」 場所：マウイ島

2004年3月 公演名「Dance Quake IV」 場所：ホノルル，ヒロ（ハワイ島），マウイ島

2005年3月 公演名「Asia Pacific Performance Night」 場所：ハワイ大学

2004年10月 公演名「Autumn Festival of Ryukyuan Court Music and Dance」
 場所：ハワイ大学

2006年5月 公演名「琉球」 場所：シアトル，ワシントン

2006年11月 公演名「琉球」 場所：マウイ島

社会活動：

2001年～現在 盆踊り（オアフ島各地）

2005年 マウイ島 エイサー，三線ワークショップ

2006年 マウイ沖縄県人会 文化ワークショップ

マウイ島エイサー太鼓ワークショップ

2007年 笛，太鼓，獅子舞，三板，踊い，沖縄の歴史ワークショップ

ホノルル美術館「琉球織物」ワークショップ・「芭蕉布」ワークショップ
 ハワイ大学「琉球織物」についての講義授業

Ukwanshin Kabudan の活動については以下のウェブサイト・ブログを参照。

<http://www.ukwanshin.org/>

<http://ukwanshin.seesaa.net/>

(資料2) PROJECT UKWANSHIN 2007 写真



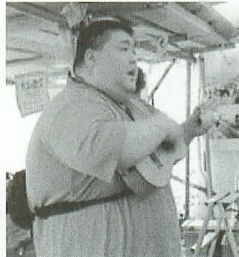
Ukwanshin Kabudan 那覇空港にて



うるま市民芸術劇場公演



アイデンティティ討論会，
 宇具志川公民館にて

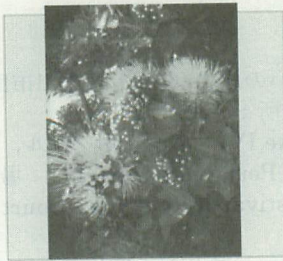


三線，ウクレレ演奏による
 辺野古座り込みへの参加

(資料3) うるま市民芸術劇場公演当日プログラム

ご挨拶

御総様、「琉球め子」公演にかいめんそうち呉みそうちいっぺーにふえていける。今夜は、我々が一世の肝心(チムグクル)と魂(タマシ)を旅のお供に、我々のウヤファーフジに捧げる公演となっております。我々は文化を継承することにより、先祖が経て来た苦悩の道を決して忘れることはないでしょう。この現代社会において、我々子孫が伝統文化をどれだけ守ってゆけるか定かではありません。しかし、琉球の伝統音楽・舞踊の継承によって、我々の文化・歴史・言語、そして我々の先祖とのつながりは常に次世代に受け継がれていくことでしよう。我々はハワイに生まれ育ち、ハワイの文化や歴史・芸能の復興を目の当たりにしてきました。そして我々島人(シマンチュ)は、我々のウヤファーフジのおかげで自分たちのアイデンティティーがあり、次世代に真の沖縄の歴史や文化を伝えていく義務があります。沖縄の苦悩の道が未だ続くなかで、沖縄の歴史や文化は変わりつつあり、忘れ去られようとしています。過去、つまり戦前の沖縄への架け橋や絆が失われようとしている今、我々が守っていかねばなりません。本来のアイデンティティーを守るためには、我々の責任を自覚しなければなりません。我々のウヤファーフジが今の沖縄を見ていたら、どのように感じるか想像してみてください。彼らの血は確実に我々の体に流れています。これら全てのことが分かった時、「琉球め子」としてのアイデンティティーは自ずと開花することでしょう。



むとうぬ沖縄守れ

我ったやハワイからちやあびたん。我った一世や、1900年に、ハワイんかい向かてい出じたん。夢抱ち、ハワイうてい儲きてい、沖縄んかい戻ゆるはじやいびたん。やしが、くぬ夢め叶うとや無ん、いっぺー苦ちまんどおいびたん。苦ちさるばす、なちかさるばす、歌三線しなぐさみ合ちちやあびたん。くぬ我った一世め苦ちさ忘てないびらん。我った血にや沖縄め文化ぬ流りとおいびいくとや、うり捨ていていやないびらん。いちまでいん、我った一世め残し来る寄言とう生まり島ぬくとう肝に留みてい行ちやびらやーさい。島言葉とちむむ、琉球め光ちよわり、御万人ぬ交じり、揮でいしでいら、我った一琉球め子。



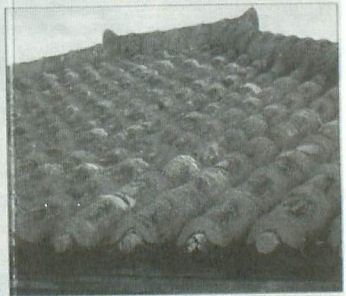
「琉球め子」

今夜は、私たち沖縄の文化や過去、ご先祖様たちとつながる旅へと皆様たちをご招待したいと思います。本公演でお見せする音楽や踊りを通して、琉球王朝時代から現代までを訪れたいと思います。沖縄が経て来た歴史的困難や外部からの多大な影響がある中で、音楽や踊りは我々の言語や精神を保ち続けてきました。私たちご先祖様が自信を持って島人(シマンチュ)であり続けた時代へと一緒に旅立ちましょう。沖縄のホスピタリティーや音楽、文化、芸能がアジア中で認められ、尊重されてきたように、琉球の灯火は明るく燃えていました。今夜披露される音楽や踊りは、昔ながらの三線の音と共に、私たち一人一人の心を貫花(ヌチバナ)のようにつなげることでしよう。どうぞ、皆様ごゆっくりご覧下さい。

歌と踊いや島人ぬ心と力

演目

- | | |
|---------|-----------------------|
| 一部 | 大節 |
| 柳 | 和多エリック |
| 作田 | 和多エリック |
| 諸屯 | 和多エリック |
| 独奏 | 歌三線・琉球め宝 |
| 干瀬節 | 仲兼久キース 教師 |
| 子持節 | 金城ノーマン 師範 |
| 二部 | |
| 鷹(ぜい) | 和多エリック |
| 高平良萬才 | 和多エリック |
| 海人・創作舞踊 | 宮崎貴子、安富祖静江、高橋仁美、島袋キース |
| 鳥唄/ふるゑ歌 | |



出演者

- 歌・三線 金城ノーマン・仲兼久キース
 胡弓 森田夏子
 琴 知念千香子
 半唄 新垣千里
 太鼓 比嘉けいこ
 踊り手 和多エリック・安富祖静江
 宮崎貴子・高橋仁美・島袋キース